個性を生かした『和』の世界

12月にこんもりホール(春日町）で、展示会を開催した3人組の「福うさぎ」。展示会開催は4回目。陶芸・織物・古布作品とそれぞれ違うものを1つの空間で共有し、独特の世界を広げています。

３人を共通するもので結び付けたものは特にはなく、顔を合わすのも年に何回か、展示作品も「三人三様」で何を作っているかは、お互いに知らないという。なのに、ホールに飾られた作品の数々は、お互いに相まって、落ち着いた、何かホッとさせてくれる空間を創り出しています。3人に共通するのは、「和」という日本古来の美にこだわっていること。

「福うさぎ」のメンバー
左から目黒久美子さん・江口幸子さん・中川由美子さん
（北栄町）　（西町）　（太美町）

仲間の２人の干支がウサギということから「福うさぎ」と名づけた３人は、普段は、それぞれ多彩な趣味と才能を発揮して活動しています。

陶芸を手掛ける中川由美子さんは「子どもが手を離れた10年ほど前に、この先長く続けられる奥が深いものをやってみたい、と考えたときにたどり着いたのが『陶芸』でした」と江別の陶芸市で見つけた作品をきっかけに陶芸教室に通い、平成14年10月に独立、念願の窯を持ちました。夏には道民の森月形地区でインストラクターとして、訪れる人に陶芸を教えています。「陶芸は同じものを作ってと言われても、近いものはできても絶対同じものにはなりません。火の入れ方で想いどおりの作品に仕上がらないことが多いのですが、奥が深くて面白みがありますね」と話します。

高校時代からやってみたかったという織物を展示しているのは、江口幸子さん。綿、シルク、ウールなどを一織り一織り織って行く地道な作業を繰り返し、小物や服に仕上げます。作業半ばで自分がイメージしたものと違うときは縦糸にはさみを入れてやり直すほどのこだわりを持ち、和裁も手掛ける江口さんは「今年の成人式には、自分で仕立てた振袖を娘に着せることができました。今年は、自分で糸を選んで色を染め、着尺の反物にして着物を仕上げてみたいと思っています。織り機に1000本以上の縦糸を掛ける作業は大変ですが、いい先生にも巡り合えたので叶えてみたい」と新しいことにも挑戦します。

骨董市で明治、大正の着物などを集める目黒久美子さんは、古布をタペストリーやのれん、小物に蘇らせています。大きなものでは振袖で布団を作ったことも。他にも多岐に渡った活動をしている目黒さんは、自ら着物を着ることも多く、成人者の振袖の着付けを依頼された家まで出向いて行っています。また成人式場で、振袖姿の女性の着物をさりげなく直す心遣いも忘れません。「その家に行って着付けをすると、家族みんなが娘さんを見て喜んでくれます。着付けのやり甲斐がありますね。式では、せっかくの晴れ舞台に着物が着崩れていては台無しです。少しでもお役に立てればと思ってやっています」と話します。また、手話サークルを結成して、ろうあ者とのコミュニケーションを大切に活動したりと、実に幅広い才能を発揮しています。「福うさぎとして活動するのは年に1回ほどですが、違うものを手掛ける3人が展示会をやっていて面白いのは、違うものだからこそ、相手の作品からヒントが貰えて、また、相手の作品を生かすには、自分がどう取り組むかなど新しい発想が生まれますね。3人が共通して持っている『和』の魅力と、陶器の硬さと布の柔らかさをうまく組み合わせて5月にまた展示会をやりたいと思っています」と話す3人の個性が織り成す作品展示が、楽しみです。

広報「とうべつ」2月号　平成16年2月1日発行　通巻605号　編集　企画部秘書課